

# 歴史を語る建物たち

庄内編  
(第6回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

## 大宝館（鶴岡市）



鶴岡公園の一角にある大宝館は、大正4（1915）年に建造され、今年（2015年）で建築100年を迎えた。「大宝館」の名は、中国の易経にある「天地の大徳を生という。聖人の大宝を位という。」から名付けられた。現在は、郷土ゆかりの人物資料館であるが、かつては物産陳列所や図書館として利用され、昭和56年に市の有形文化財に指定された。

### 最初は物産陳列場、集会所、図書館の複合施設だった

元号が明治から大正に変わると、国中でそれを祝う機運が高まった。鶴岡町（現・鶴岡市）でも例外ではなく、大正3年の町会（町議会）では、記念事業として町立図書館を建設する計画が持ち上がった。しかし、当時の議員には実業家出身者が多かったことから、図書館以外にも物産陳列所を併設し、さらに公会堂的な機能も持たせたいとの要望がなされた（『鶴岡市史』）。大正3年5月から工事が始まり、翌4年11月10日の大正天皇即位の礼に合わせて開館した。

白い壁に赤いドームが特徴である。床面積が150坪ほどあったが、上記の事情もあり、図書館部分の面積はわずか18坪に過ぎなかった。

一方、大正14年に大宝館開館10周年を記念し作成された『大寶館一覽』によると、陳列された物産は全体で70品目以上に達する。それも、絵ろうそくや漆器と



開館当初の大宝館。お堀には船が浮かんでいる。  
出典：「ふるさとの思い出写真集 鶴岡」（国書刊行会）

いった鶴岡の伝統工芸品だけでなく、タオルや靴下といった日用品や、菓子やサイダーといった飲食品なども陳列され、実際に販売もされていた。売り上げは町が一元管理し、一定の手数料を取って出品者に返していたようだ。

### 時代とともに用途も変わる

大正13年に鶴岡町が鶴岡市となり、都市としての規模や機能が大きくなると、図書館も物産陳列所も手狭になった。そこで、大正14年に大宝館の北側に新図書館が竣工し、大宝館の図書館機能は新図書館に移転して広くなった。

しかし、太平洋戦争の戦況が悪化すると、次第に物産陳列所は物産の陳列が困難になり、昭和20年に閉鎖された。そして、図書館は再び大宝館に移り、新図書館では東北3396部隊が国民兵の教育を行った。また、空襲目標を避けるため、大宝館の外壁全体が黒く塗られたとも伝えられている（黒塗りの写真は現在残っていないが、昭和24年撮影の再び白く塗装された竣工写真が残っている）。

戦後の大宝館は、図書館機能が再び北側の新図書館に移転し、占領軍の指導で鶴岡市物産陳列所（Products Exhibition）が開設された。一方で、市の商工課や商工会議所、中小企業相談所も入居した。それらが退去し、大宝館が全館図書館となるのは昭和26年11月22日のことである。大正14年に新築した新図書館も、主に書庫として使用された。

その後大宝館は昭和56年に鶴岡市有形文化財に指定された。そして、昭和60年に現在の市立図書館が建設されたことによって、全館図書館としての34年の歴史に幕を閉じた。

### 保存・活用をめざして

図書館が移転し、大宝館は用途がなくなった。こういう場合、一般的には「解体か保存か」というところから議論が始まるものだが、当時の記録によると、大宝館については最初から「保存活用」に向けた検討が行われている。「やはり、大正天皇の即位を祝うために建てられた建物を解体するのはいかがなものか、という雰囲気があったのでしょうか？」と筆者が問うと、担当者は、「それよりも、長年、市立図書館として市民に愛されてきた歴史的な建物を残すことは、ごく当たり前という雰囲気の方が大きかったらと思います」と答えてくれた。

ただ、建物は老朽化が進んでいたため、全面的な修理が必要であった。そのため、地元の業者が半年かけて大規模な復元工事を行った。

活用方法についてはいろいろ検討されたようであるが、最終的には郷土の先人・先覚者の業績を紹介する

資料館に決まり、準備期間を経て昭和63年4月にオープンした。

館内に入ると、鶴岡にゆかりの人物がこんなにいるものかと驚かされる。とりわけ、明治の文豪・高山樗牛の生家を一部移築しているのは、「建物の中にある建物」という意味で興味深い。また、昭和を代表する作曲家・中田喜直が、冬の鶴岡を訪れた時に見た情景から曲想を得たという「雪の降るまちを」の作曲に用いたピアノも、来館者の目を引く。

### 200年、300年と残る建物に

入館料は無料で、鶴岡市のシンボリック施設として各種パンフ等に掲載されていることもあり、大宝館を鶴岡観光の拠点に訪れる人も多いようだ。担当者も、「（大宝館は）文化財系の所管ですが、他の部署とも連携しながら、観光スポットとして、より多くの方に訪れていただきたい」と語る。市政企画課と協力し、昨年7月より鶴岡シルク「kibiso」を展示しているのもその一環だという。

開館100年を記念して、今年の7月末から年度末まで100年の歴史を振り返る写真展を行っている。これは市民の方に古い写真の貸し出しを呼びかけ実現したものだ。「100年の間に物産陳列場、図書館、人物資料館と変遷を経てきた大宝館だが、古い写真に触れることで初めての発見があったり、往時を懐かしむ声をいただいたりしている。この写真展が市民の皆さんのご協力で実現できたことは非常にありがたいことだ」と話す担当者の口調からは、大宝館への愛着と誇りが感じられた。

そして最後に、「時代時代でさまざまな役割を果たしてきた大宝館だが、鶴岡のシンボルとして、市民の方々に親しまれ100年を迎えることができた。これからも、200年、300年と残るにふさわしい建物として守っていききたい」と語ってくれた。

（東北公益文科大学特任講師・山口泰史）



鶴岡シルク「kibiso」を使って、市内の高校生らが作ったウェディングドレス。「kibiso」は今年のミラノ万博でも出品され、今後が期待されるブランドである（筆者撮影）。